

## 井上和子先生との思い出

著者	藤巻 一真
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
号	24
ページ	20-21
発行年	2018-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001498/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001498/</a>

## 井上和子先生との思い出

藤巻 一真

一冊の本との出会いがそれを読んだ人の心を揺さぶり、時に歩むべき道を示してくれることがあるように、井上和子先生との出会いが私の歩む道を決定づけたといっても過言ではない。この巡り合わせは私にとって幸運であった。

2017年に30周年を迎えた神田外語大学が、開学して2年目の1988年の春のことである。井上先生は60代後半で、私が生まれる前から言語学の分野に身をおかれ、私は20代になったばかりで、物理と英語に強く興味を抱き、都会で一旗揚げようと思って田舎から出てきた若僧であった。しかし、すでに半世紀近く先を歩まれていた井上先生は、気力や体力においても遥かに勝っていたように思う。

その井上先生の「英文法」の授業を受講する機会に恵まれた。当時、井上先生の偉大さを知らなかった私は、ただただその授業内容の面白さ、先生の醸し出す雰囲気や発せられるお言葉、そこから感じられるお人柄に、自然と引き込まれていった。そこで初めて生成文法的な考え方に出会ったのであるが、辞書を片手に英語で書かれた厚めのハードカバーの教科書と格闘しながら、内容が少しでも理解できると知的興奮を覚えたことを思い出す。3年次には先生の必修の英語の授業も履修し、英文で書かれた言語学系の基本的な読み物を読み、私の言語学のバックボーンが形成されていったのである。

この英文法の授業でのご縁がきっかけで、この後、読書会に誘って頂き、本格的な生成文法の書物や論文を通して、当時まだ知らなかった現象やその分析に出会い、ますますのめり込んでいったように思う。同時に井上先生の英文法の授業を受講していた朋友の上田由紀子さんとも出会い、その後勉強会、大学院修士課程、博士課程、特別研究員（COE）、井上ゼミなど、現在に至るまで言語研究を通してお互い切磋琢磨することになった。また、この間、井上先生とご縁のある研究者の先生方からご指導を頂くことになり、今は亡くなられた山田洋先生、村木正武先生、黒田成幸先生を初めとして、エモンズ先生、長谷川信子先生、宮川繁先生など、多くの個性的で魅力的な研究者の方々に巡り合うことができた。どの先生方も井上先生という星の魅力に引きつけられながら

独自の道を進まれている姿に、私も先生方のようになりたいと思い、言語研究を行いながら現在に至るまで人生の歩を進めてきた。そしてようやく、この年になって独自の軌道を描いてゆっくりとではあるが自分なりの道を進んでいけるようになったと思う。

2017年7月の「井上先生を偲ぶ会」の少し前、先生と過ごした日々を振り返っていると、先生のお人柄が青、白、赤の色に思えてきた。フランス国旗の色である、この3色の組み合わせは実に美しく感じられる。まさに井上先生は、この色が表すとされる「自由、平等、博愛」を体現されていた。特に井上ゼミでそれをより強く感じられた。井上ゼミは先生が学問的に自由な雰囲気を作って下さり、そのなかで言語研究に真剣に向かうことができた。院生や我々のちょっとしたアイデアや意見にも真剣に耳を傾けて下さり、多くの知見を与えて下さった。一方でランチタイムやコーヒブレイク時には世間話やご家族のお話をして下さり、ゼミの参加者の身の上や家族のことをいつも気にかけて下さった。私が研究を途中であきらめそうになったときも、暖かく長期に渡って励まして下さり、博士論文を書き上げることができた。駅までのタクシーの中で「私の目の黒いうちにね」と優しく励まして下さった言葉は、忘れられない一言として心に刻まれている。学位をとれた時は本人以上に喜んで下さり、その時、井上先生から頂いたお祝いのメールのタイトルには3つもの感嘆符が付いていた。

井上先生はお目にかかるといつも開口一番に、「どうですか」とお声をかけて下さる。この問いかけは、心身と研究の調子を尋ねるものであり、自信をもって返答できたことは少ない。今でも、あの笑顔とともに愛情に溢れた先生の声が聞こえてくるが、この問いかけに、自信をもってお返事できるように言語研究に勤しんでいこうと心新たに思うのである。

井上先生、有難うございました。いつかまた、そちらの井上ゼミに参加させて頂くその日まで、こちらの世界で先生の歩んだ道の遥か後方を、自分なりに少しずつ歩いていきます。これからも我々をお導き下さい。